

対談:「教養」から「文化」へ

淡野 弓子 (ハインリヒ・シュッツ合唱団指揮者) / 大村 恵美子

大村 このところ、私は、「ボンヘッファー研究会」で、ボンヘッファーの『獄中書簡集』の中に触れられている音楽を、その一部分ずつだけでも集めてCD 1枚 (約 70 分) に収め、また歌えるものは譜例を添えて、会員の方々に提供しようという計画で、原文に基づき 29 ヶ所に引用された音楽の演奏例と楽譜を集めています。音楽は、M.ルター、P.ゲルハルト、バッハなどのコラールから、シュッツ、ヘンデル、ベートーヴェン、シューベルト、ヴォルフ、レーガー、ディストラ、プフィツナー、オルフ、グリーク等にわたり、それらの音源を揃えるのに、ずいぶん多くの方々のご協力をいただきました (10 月 10 日完成)。

全部について、手持ちでないものは、予算のまったくない中で、なるべく新しく買わずにすませたいと思い、図書館や個人の方々からほとんどお借りすることになりました。

シュッツに関しては、すぐにシュッツ合唱団の淡野弓子さんにお願いすることを考えたのですが、ずいぶん長い間、演奏会の招待状のやりとりだけで、お目にかかる機会もなかったのが、貴重な音源を拝借するという厚かましいお願いを、打ち明けそびれていたのです。でもやはり、ずばり本拠のご教示をいただいて、それにしたがってCD店にあたるとか、行動を起こそうと思い直し、お手紙を差しあげたところ、結局ご使用の楽譜や、シュッツ合唱団の録音テープなどを、淡野さんご自身がお持ちくださるといふ、大変なことになってしまいました。

ご指定は 10 月 3 日、17 時 30 分、新宿で、とのお電話でしたので、ことと次第では、お食事をしながら、オフレコでもやま話におよび、それをまとめて、「月報」の対談記事にさせていただけるかと...

淡野 ほんとに久しぶりで、うれしいですね。比較的ゆっくりお目にかかったのは、1984 年 (19 年前!) 4 月に、ゲヒンガー・カントライを率いて東京に来られたヘルムート・リリング氏が、おひとりで経堂の「カフェハウス・バッハ」を訪問されたとき、私も同席させていただきました。その後、同じ年の 7 月 1 日に、新宿三井ビル 54 階の「メヌエット」で、東京バッハ合唱団の創立 22 周年を祝われたとき、東ドイツのイエーガー大使もお見えになり、私も参加させていただきました。

した。その 2 回くらいでしょうか。いつも「月報」をお送りいただき、ただもう敬服しています。どうしてあんなに、すらすらとお考えが流れるような文章となるのでしょうか。

大村 よくパソコンなら楽なのに、と言われるのですが、私は一般に、文明の先端をゆくカタい道具にふれるのが嫌いで、たいていは、早朝目覚めてすぐにベッドの上で書き出すことが多いので、近頃は、「めぐり逢う時間たち」という映画の中で、ヴァージニア・ウルフが使っていたのを見てさっそく画板を買ってずいぶん楽になったのですが、その上で紙とペンがあれば、パソコンなんかよりもよほど速く、しかも純粋な操作だけで書けます。これを替える気は一生ないでしょうね。

淡野 ちょっと飛躍しますが、最先端とは逆に、シュッツやバッハを当時の演奏形態で、という考えがありますね。私も試行錯誤をくり返す中で、なるほど、と思うことも多々ありました。しかし、楽器や編成など目に見えるところのみを調べても、意図したところへ到達するのかどうか...

大村 私も、不勉強なせいでもあるのですけれど、たとえば当時は、あまりエリートとして選ばれたわけでもなかった少年たちが、毎週新しい楽譜を押しつけられて、聞いたこともない音楽を本番になんとか間に合わせて歌っていたのでしょう。バッハが今の演奏を聞いて「ずいぶんりっぱに歌ってくれるなあ」と感謝しているかもしれない、ということもあるのではないかしら。なにしろ、数日の練習だけで世界初演になったわけですから、半年、一年と練習する私たちとは比べものにならない早わざですものね。

淡野 ほんとに。私自身は、バッハの時代に倣ってみたいことが一つだけありました。それは、1 週 1 回、新しいカンタータを演奏してみたいということです。実は、この秋からこわごわ始めてみました。毎回牧師がバッハのカンタータの骨子となった聖書の箇所を朗読していただきます。

大村 大変ご理解のある方ですね。その牧師さんは何とおっしゃる方ですか?

淡野 日本キリスト教団本郷教会の廣田登牧師です。

大村 シュッツ合唱団の練習は、週何回ですか？

淡野 月、水、土と3回です。

大村 ふつう週1回というところが多くて、月、土と2回の私たちが多いいと思ったら、もっとしていらっしやるのですね。なにしろ淡野さんの完全主義には、頭がさがります。内容もきつと徹底したものだと思察しますが、よくみなさんついて来られますね。何人くらいでやって来られたのですか？

淡野 40人台をこえることはなかったですね。

大村 うち、杉山好先生が、発足後の早い時期に「市民運動として意義深い」と言ってくれましたが、大まかな練習ではありますけれど、でも、歌なんか歌ったこともないような方々が入って来られて、もうすっかり生活に元気が出てきて、楽しくてしょうがない、ということが多いのですから、それなりのバッハの功德はあるのでしょうか。

淡野 私も、「教養」から「文化」にまで深まらなければ、と念願しているのです。バッハのカンタータを日本語で、というのはとても素晴らしいことです。私もこの頃は、シュッツのレチタティーヴォの部分、杉山好氏訳で、また息子の太郎もだんだんと日本語訳に興味をもち、自分で訳し始め、日本語で演奏したりもするのです。

大村 シュッツの音楽でもですか？ 私は、淡野さんがシュッツをメインに始められ、こんなに長いこと続けていらして、もう驚嘆しています。シュッツは、ドイツ語とぴったりよりそった作曲で、私には、ドイツ語圏の人にしか親しみにくいという印象があって、とても厳しい音楽のように思えるのです。

淡野 シュッツの日本語訳といってもレチタティーヴォの部分のみです。ポリフォニックな部分は、おっしゃるとおり、ドイツ語とあまりにも密着した音楽ですので、今のところ日本語への可能性は見えていません。私は、シュッツを通して、ドイツ語というものがどのような音楽を生み出すのか、ということを知りたかったのです。

こんど、このボンヘッファーの著書などに思いをよせると、シュッツの音楽はまさに極限状況の音楽だといえるでしょうね。今また世界がこんなことになって...

大村 どうしてこんなことになってしまったのでしょうかね。ほんとうにおかしなことになったと焦りながら、どんどん人類は自分の手で悪化の道を突き進んでいるようですね。

大村 シュッツ合唱団のメンバーは、どんな方々ですか？

淡野 つねに地道な勉強をつづけ、まじめで深い心をもった人々です。私はとても尊敬しています。60代後半から合唱に必要なドイツ語を学び始めた人たち、

働きながら放送大学を卒業した人が、それぞれ3人います。

大村 ひところは、60歳、70歳と、自分も含めて高齢化してゆくのに、どう対処したらいいのか、とまどいもありましたが、今や、定年退職後に第2の充実した人生を、と希望に燃える中高年が、底力を発揮する社会になったように思います。とくに生産の面よりも文化を担う役割として。

淡野 そのとおりです。うちでも高年の方々が無遅刻、無欠席で活躍していらっしやいます。

大村 これからは、私たちの合唱団も、日本の社会も、どうなってゆくのでしょうか。私も、いつまでもしがみついて、ということにならないよう、2007年の創立45周年をもって潔く、などと公言したのですが、その「これからが充実の人生」組がふえてきたこともあり、後世に引き継いでもらえるよう、楽譜やCDを出し、教会カンタータの全訳までできてしまって、まあ、いのちがある限り、十年一日の平常心で続けてゆくしかないと思直しています。

日本の社会も、西洋文化に追いつけの段階から、先ほどおっしゃったとおり、一部の特権的な人たちの「教養」にとどまらず、人生の価値に直接たずさわる「文化」へと、消化されなければならず、きっと必然的にそうなることでしょう。



淡野弓子氏

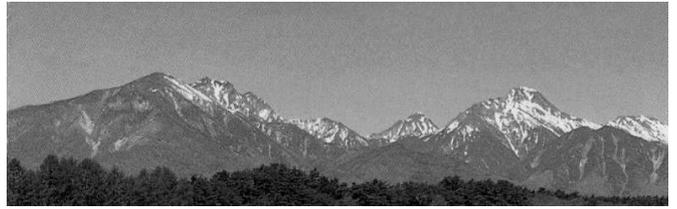
淡野 私ども、2001年の10月にシュッツの全作品の演奏が終わりましたので、現在新たにシュッツ作品の録音にとりかかっています。9月末に東京カテドラルで、1625年の<カンツィオネス・サクラエ>(全40曲)のレコーディングをしましたが、予定の3分の1しか進まず、改めて録音の厳しさを感じています。

大村 それぞれ、私が1954年(第2回)、あなたが1961年(第9回)に東京芸術大学を出て、修学をつづけたり留学したりしながら、バッハとシュッツの草分けの合唱団をつくり、手探りで切りひらいてきて30年、40年、こんなに続いたのは、思ってもいなかった幸運ですね。このたびは、ボンヘッファーのおかげで、こうしてあなたとゆっくりお会いする機会に恵まれ、ありがとうございました。これからもご協力を仰いだりしながら、感謝の仕事をそれぞれに続けてゆきまし

よう。

淡野 私も今、日々感謝の気持ちで一杯です。願わくは、バッハのコンタータを聴きに行こう、というようなことが、家族の年中行事の一つに採り入れられるようになるとよいと思っています。お子さんのお誕生日とか、亡き人を偲ぶとか...

今日は思いがけなく、大村恵美子さんとこんなに親しくお話をさせていただいて、とてもうれしく思います。ボンヘッファーがこのような機会を与えてくれたのですね。彼はピアノがうまく、家庭音楽会ではヴォルフの歌曲やシュッツのコンチェルトの伴奏をしていたとか。同年代の作曲家フーゴー・ディストラートと同じく、若くしてナチスの犠牲となった彼に、私も特別な関心をいただいていた。シュッツやバッハ、ボンヘッファーやディストラートといった人々のメッセージを全身で受けとめたいと思います。ありがとうございました。(了)



剣に自分自身の問題として考えなければならないときがきている。そして歴史が動いていること、時代が変わったということ、それを忘れてはならないと思います。

ところが今アメリカがイラクでやろうとしていることは、人類が戦争のない世界をつくらうとして平和に向かって、一つひとつ積み上げてきた石の建物をぶち壊そうとしていることではないでしょうか。人類のこの必死の営みに真っ向から刃向かってこれをぶち壊そうとしている。私にはこれはとっても許せない。以上はこれは客観的な視点です。

つぎに2番目の主観的な問題についてです。

戦争というのは、基本的には人間と人間が殺すか殺されるかの関係におかれることです。本来人間とは「人の間」と書きますように、人との関係において生きているわけです。その関係は、本来は殺すか殺されるかというのではなくて、お互いが愛し合って理解し合って信頼し合う関係を、人間と人間の間で作り、そして一緒に生きていく、というのがこれが人間ですね。戦争はそれを真っ向から否定する。人間が人間であることを許さないのが戦争です。

ほんとうに戦争を語れる戦争体験者というのは、戦争によって殺された人と戦争によって人を殺した人かもしれないと私は思います。戦争によって、絶対に奪われてはならない人間の尊厳を奪われた人と、絶対に奪ってはならない人間の尊厳を奪った人とです。私は戦争によって殺されませんでしたし、幸いにして一人も殺しませんでした。ですから本当は戦争について語る資格はないのかもしれませんが。人ごととして語ることをお許しください。あえて、戦争によって殺されることとはどういうことか。戦争によって人を殺すとはどういうことか。この2つの人ごとを想像力を働かせて語ります。

まず殺されること。1931年、私は小学校6年生でした。この昭和6年に満州事変が起きました。あの太平洋戦争が始まる1941年までちょうど10年ですね。1931年はいわゆる大正デモクラシーの時代が終わって戦争の時代に入って行く。日本が奈落の底に落ちこちていくその10年というのはすさまじい歴史でした。残念ながらそれについていま語っている時間はありません。

ただ私がここで1つだけ言っておきたいのは、われわれは手遅れにならないうちに、戦争に入らないため

私はアメリカのイラク侵略に なぜ反対し闘うか

(連載2)

森井 眞(団友)

(1) 帝国主義の時代に帰ることは許されない...月報第496号
(2003年10月号)

(2) 100パーセントの死を覚悟するということ

とにかく力で相手を支配する帝国主義の時代は終わったと思うんです。そして歴史は変わったと思います。

しかしその変化を認めない人、あるいは気がつかない人が実にたくさんいます。あそこで変わって、もう戦争のない世界をつくらうという主張に対して、「そんなことができるわけがない」と実に多くの人が言います。「人類は歴史上ずっと戦争を続けてきた。これからだって戦争がなくなるわけがない」と実にたくさんの方がそう思い、そう言います。

国家権力は戦争と死刑という人間を殺す2つの権利を行使してきました。ところが20世紀を終わって、死刑はついにアメリカ38州と日本を除いて、いわゆる先進国では廃止されました。これはたいへんな成果だと思えます。あとは戦争です。

核兵器がつくられた以上、もう戦争はしてはいけないと私は思います。また仮に核兵器ではなくても、それに劣らないようなすごい大量破壊兵器をアメリカはつくっていますでしょう。あれがどんなかたちで使われるのか。もうとにかく第1次大戦・第2次大戦を経験したわれわれは、戦争というものについて本当に真

に全力を注がなければならぬということです。手遅れになっても全力を尽くさなければなりませんけれども、でも手遅れになればなるほどわれわれの選択肢は少なくなっていきます。そして手遅れになればなるほど犠牲者が増えていく。そして戦争と闘う営みは美談にされていきます。美談になってはもうだめなんです。そうならない間に打てるだけの手をわれわれ一人ひとりが打たなければいけない。今まだ打てることがいろいろあるんです。

私は1941年の4月に大学に入学しました。その年の12月8日に太平洋戦争がはじまりました。今でもよく覚えております。あの真珠湾攻撃のラジオ・ニュースを聞いた後、抜けるような青空の下を図書館の石段を登りながら、「ああ、俺の命はもう長くない」と全身が震えるような思いで覚悟を決めました。たちまち在学年限がたちまして、1943年9月に追われるように大学を繰り上げ卒業になりました。そして赤紙が来て、12月1日に兵隊にとられました。

私は弱虫ですからいやなんです。兵隊、戦争大嫌い。でも徴兵を忌避して逃げるだけの勇氣はありませんでした。隣組の人たちが日の丸の旗を振って私を送り出しました。家を去るとき、本当に「いよいよ俺も最後だ、ここに帰ることはもうない」と、覚悟して行ったんです。

軍隊で入れられたのは高射砲隊でした。私は、高射砲隊というのはどういうものかよくわかりませんでした。白兵戦つまり敵の陣地に飛び込んで歩兵が戦うような危険なところではなくて、ゴールキーパーかディフェンダーみたいな割合安全なところだと思っていました。ところがこれが間違いで、戦争が始まると一番はじめに徹底して潰されるのが高射砲の陣地なんです。隅田川のそばの高射砲陣地に行ったんです。それは東京にはありましたけれども、第一線の出動部隊ですので、常に死を覚悟しなければならなかったんですが、私は幹部候補生でしたから、そこに1年近くおりました。1945年の2月のはじめに千葉の高射学校に送られました。東京が襲われたあの3月10日の大空襲の直前です。

もし私が2月に千葉に移送されていなかったら、私はいまここに立っていなかったかもしれない。3月10日の東京大空襲で墨田の高射砲陣地は変わり果てました。そこへ帰って見たら、私と一緒に入隊して千葉に移らなかった友人たちが死んでおりました。本当に運が良く生きて残ったのです。

高射学校に移りましてから夏になりますと、毎日毎日「対戦車肉薄攻撃訓練」というのがはじまったのです。「対戦車肉薄攻撃」というのはタコソボを地面に掘ってそのなかに爆薬を手を持って入って、戦車がやってくると這い出して行って、戦車の一番灼熱している

ところに爆薬をつけるんです。「以後、戦闘不能に陥るべし」と書いてある。木っ端微塵になくなっちゃうんです。

それまでも空襲のたびに私たちは死を覚悟していました。「いつ死ぬかわからない」と思っていました。だがこれは100パーセント死ぬということなんです。死の可能性が何10パーセントかで生きられる可能性が何パーセントかはあるということ、たとえば98パーセント死ぬということ。これと100パーセント死ぬということとは質的に違うんです。

これがはじまりましてから、20歳代の青年が見る真夏の太陽が鉛色に見えだしたのです。その日がいつ来るか。毎日覚悟を決めてその日を待っておりました。高射学校で教育を受けた同僚たちが次々と第一線に飛び出していきました。

私は高射学校の教官に残されてしまった。飛ばされないまま高射学校にいるあいだに8月15日を迎えたのです。本当に運が良かったと思います。すごい解放感をおぼえました。

終戦の後しばらく、私は将校だったので、将校会議所で毎日集会があるんです。「全員切腹しろ」と言い出すんです。「山に残って最後まで抵抗しよう」と言う者もいました。毎日毎日その談義をくり返しました。何日たったかわかりません。幸いにしてそうしたことが起こらないで、9月頃に家に帰りました。それでも、私は当分のあいだは死を覚悟して生きておりました。

(つづく)

演奏会資金にバザーの献品をお願いします。

来たる12月7日の定期演奏会も、例によって困難な予算で準備が始まりました。私たちの演奏会は、毎回、思いがけないご寄付やバザー収益などによって、結果的に収支がなんとか整うことが多いのです。

今回も、団員や全国の支持者の方々から送られてくる品々を、練習日ごとにバザー形式で販売し、資金づくりにさせていただくことにいたします。

受付期間：年内いつでも

お送り先：合唱団事務局

〒156-0055

東京都世田谷区船橋5-17-21-101

e-Mail: bachchorotokyo@aol.com

TEL: 03-3290-5731

FAX: 03-3290-5732

どうぞ皆様のご協力を
よろしく願いいたします。

東京バッハ合唱団演奏会係

